

氏名	大野ロベルト 准教授
こんな研究をしています	紀貫之を中心とする古典文学の研究をとおして、日本の言葉や文化がどのような仕組みを持ち、どのように発展してきたのかを考えています。また、近現代における古典文学の受容や、翻訳による海外への越境などについても研究しています。
こんな成果を挙げています	『土佐日記』英訳ことはじめ』『日本研究』62号、2021年、69-91頁。 “Circle within Walls: A Comparative Study on Poets of Leprosariums,” in <i>Recent Scholarship on Japan: Classical to Contemporary</i> , Cambridge Scholars Publishing, 2020, pp. 57-74. 『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019年。 “À la maison de Shibusawa: the Draconian Aspects of Hijikata’s Butoh,” in <i>The Routledge Companion to Butoh Performance</i> , Routledge, 2018, pp. 71-77. 『日記文化から近代日本を問う』（共著）笠間書院、2017年。
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	文学理論を援用してテキスト分析を行うことを続けて来たため、様々な表現や文化的事象を幅広く、理論的に検討することに興味があります。 文学に関しては古典だけでなく、明治期から昭和期までの近代文学はもちろん、フランス文学やドイツ文学にも親しんで来ましたので、世界の文学に対する日本文学の位置というものにも興味があります。 また、文学と権力（例えばハンセン病文学など）、言葉と身体（能や舞踏など）といったテーマについても興味を持ち、研究しています。
こんな授業を行なっています	「多言語相関論ⅡA・B」 パロディという汎用性の高い概念を介して日本文化の特徴を抽出したうえで、それを異なる時代や文化の場合と比較検討するプロセスをとおして、論理的に思考する技術を身につけます。 パロディは言うまでもなく笑いと結びついており、研究という堅いものとは対照的なイメージがありますが、おそらく笑いは人間にゆるされた最も高度な行為の一つです。笑いについて考えることは、人間について考えることなのです。
学会や社会でこんな活動をしています	求めに応じて、古典に関する展示や番組などの監修を行なっています。例えば、日本科学未来館の常設展示に、制作に協力した紀貫之のディスプレイがあります。 また、翻訳研究の実践編として、大野露井という筆名で海外の文芸作品を翻訳紹介しています。業績にサックス『魔宴』（彩流社、2020）、フェルサン『リリアン卿』（国書刊行会、2016）などがあります。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	専門の観点からも、ぜひ紀貫之を挙げたいと思います。大陸の文学である漢詩を消化しながら、日本独自の表現の地平を切り拓いた貫之のような歌人たちの活躍がなければ、現代の私たちの言葉や世界観はまるで違うものになっていたはずで、結局のところ、文化を守り育てることができるのは、異文化に心を開くことのできる人々なのです。